「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿<９月２１日（金）放送分>

テーマ「郷土の偉人」

あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は，毎月第３週に，奄美にゆかりのある作家や偉人を紹介するシリーズ「郷土の偉人」の６回目です。

今朝は，先月に引き続き，奄美群島日本復帰から節目の年に発行されている「郷土の先人に学ぶ」に紹介されている３人の女性の中から「歌で村人を守った人　川上鶴松（つるまつ）」を紹介します。

川上鶴松は，今からおよそ２００年前の１７９１年（寛政（かんせい）３年），笠利町の大笠利で生まれました。

鶴松は，幼い頃から男勝りで気性が強く，とんちもきき，見目麗（みめうるわ）しい希（まれ）に見る美人でした。それに感受性が豊かで才知に優れ，歌を作るのがとても上手でした。

珍しいものを見たり，楽しい出来事があったりすると，心が自然に動き出し，すぐに歌を作るのでした。子供ながらもその歌のうまさに村の人々は感動したものでした。

１４，５歳の頃には，毎日の生活の中で彼女が話す言葉は，すべてがそのまま歌になったと言われています。人々から「歌作りの天才」と言われ，みんなのあこがれの的でした。

その当時，奄美の各地で流行っていたのが，「歌問答（うたもんどう）」といわれる即興的な歌のやりとりでした。「歌問答」は，大笠利海岸の広場や辺留（べる）・宇宿（うしゅく）の海岸で行われました。会場は鶴松との歌問答を一目見ようとたくさんの唄者や聴衆でわきかえりました。

「鶴松を負かしてやるのは，このおれだ。」と声を上げ，自信たっぷりの男たちが，次から次へと歌を挑（いど）んできました。しかし，鶴松の鋭い機知（きち）と即詠（そくえい）に返しの歌を作ることができず，先ほどの勢いはどこへやら，すごすごと負けて帰っていく人ばかりでした。

鶴松が生きていた頃の奄美は，薩摩藩が治めていて，重い租税を課せられていました。その当時の奄美の島々は，租税として「黒砂糖」を納めており，藩は大変厳しく取り立てていました。

藩は，すべての畑に「砂糖きび」を栽培するように言い渡すだけでなく，米を作っていた水田にまで「砂糖きび」を栽培するように強制したのです。村の人々の常食であったさつまいもさえも畑に植えることができなくなりました。

人々は，山の奥の石だらけの土地をきびをつくる仕事の合間に開墾し，かろうじて小さなさつまいもを栽培して食べていました。

さらに，租税として納めた残りわずかな黒砂糖までも徴収する方法を藩は打ち出してきました。薩摩から持ってくる米や日用品と交換できるのは「黒砂糖」と決まっていました。人々はわずかに持っていた黒砂糖も，これらの品々と交換するより生活の方法がなかったのです。

ある年の初夏のことです。大笠利で隠してある砂糖（蜜糖）はないかという取り調べのために，藩の役人たちがやって来ました。横暴な役人たちは，家々を一軒残らず屋根裏から床下までくまなく調べるので，村の人たちは鬼のように恐れていました。

機知に富んだ鶴松は，村人たちが隠し持っていた砂糖を全部自分の家へ運び込ませ，いつものように平気な顔をして機を織りながら取り調べの役人を迎えました。

機の近くまで来た役人たちは，色白でとても美しい鶴松の姿に心を奪われて呆然と立ちすくんでいました。やがて理性を失った一人の役人が，つかつかと鶴松のそばに近づいて来て，はじらう鶴松の胸に手をふれたのでした。その瞬間，鶴松のオサを打つ手がぱたりと止まりました。

役人が，はっと我に返って手を離したとき，鶴松は静かに口を開いて歌いました。
「玉乳握ちみれば　染だるより勝り，後ろ軽々と　いもれしょしら」（初めて会った私の体に勝手に触れたということは，この世の中で一番いやしいこと。役人様たるお方が，恥ずべき事です。未練を残すことなく，さっさとお帰りください）

はりつめた空気の中で，鶴松の静かだがきっぱりと言い切る歌に，さすがの役人も自分の行為を恥じたのでしょう。その場にいたたまれなくなり，肝心な蜜糖調べもそこそこに逃げるように立ち去りました。

鶴松は，命がけで蜜糖調べの藩役人を冷静に機知に富んだ歌を詠んで追い返しました。そして，村人の尊い命を守りました。鶴松の命がけの立派な隣人愛と郷土愛によるその行動は，またとない女性の英雄物語として，いつまでも後世に語り継がれることでしょう。

今回紹介した「歌で村人を守った　川上鶴松」は「郷土の先人に学ぶ」第４集に収められています。また，奄美市笠利町商工会前には，「機織りの母　笠利鶴松女史の碑」として先ほど紹介した歌が刻まれた石碑が建っています。一度訪ねてみてはいかがでしょう。

以上，鹿児島県立奄美図書館でした。